

着脱を表す動詞の日英語比較 —その服飾文化史的考察—

松 原 健 二

第1章 はじめに

英語の動詞 ‘wear’ は、衣服を着ている様を言い表す場合に最も一般的に用いられる動詞である。この動詞は「着ている」と訳されることが多いが、実際には「着ている」よりも使用される領域がはるかに広い語である。‘wear’ の目的語となり得る名詞は、服などに限られる訳ではない。ためしに手元にある英和辞典を引いてみると、次のような用例が記載されている。

wear perfume / wear lipstick / wear a hat / wear a seat belt / wear trousers
wear a ring / wear a shirt / wear a necktie / wear sideburns / wear a coat

これらは、順に「香水をつけている」、「口紅を塗っている」、「帽子を被っている」、「シートベルトをしている」、「ズボンを履いている」、「指輪をはめている」、「シャツを着ている」、「ネクタイを締めている」、「ほおひげを生やしている」、「コートを羽織っている」というような日本語に対応する。これらの用例の多彩さからも、‘wear’ という英語動詞が日本語の「着ている」という動詞とは比較にならないほどの広がりを持った、意味範疇の広い語であることが容易に窺える。

英語動詞 ‘wear’ が上記のようにさまざまな日本語動詞に対応する事実は、以前より英語学習者や英語教育関係者の間では広く知られていた。そしてその理由としては「英語の ‘wear’ は、身につけるものになら、ほとんど何にでも使える」という説明が一般的であった。確かに、日本語にすれば「つけている／塗っている／被っている／している／履いている／はめている／着ている／締めている／生やしている」など多くの動詞に対応しているとは言え、その核となる本質的な意味が「身につける」であることに変わりはない。別の言い方をすれば、何を身につけるのかという対象物によって日本語の方が細かく動詞の使い分けをしている、という言い方もできるであろう。

しかし、それではどうして ‘wear’ は幅広く多彩な名詞を目的語として取ることができるのであろうか。「身につけるものになら、ほとんど何にでも使える」という指摘が的を射ているにしても、どうしてそうなのかという疑問には答えていない。関連する文献を調べてみても、この疑問に的確に答えているものは見当たらない。言語が違えば、一般的には対応すると考えられている単語どうしの間に、意味のずれやニュアンスの違いが生じるのは多く認められる事実である。しかし ‘wear’ と「着ている」の間に存在する意味範疇の違いは、軽視できないほど大きい。どうして、これら2語の間には大きな意味範疇のずれが生じているのであろうか。

またこれは状態動詞である ‘wear’ と「着ている」の間に言えるだけでなく、動作動詞である ‘put on’ と「着る」の間にも同じことが言えるものである。すなわち、‘put on’ は「身につけるものになら、ほとんど何にでも使える」のに対し、「着る」は基本的に衣服にしか用いることができない。‘put on perfume’ とは言うが、「香水を着る」とは言えない。また服飾関係物である帽子についても、‘put on a hat’ とは言うが、「帽子を着る」とは言えない。このように英語では、広範な意味領域を持つ一つの動詞で言い表せるのに対し、日本語では何をどこにどのように身につけるのかによって動詞の細かい使い

分けをしている。このことに関して、金田一 (1988; p.214) は、「これは日本人が衣類に異様な関心をもっているのを表しているのかもしれない」と述べているが、その真偽はともかく、これら言語上の相異の発生要因として、人々の持つ衣服に対する考え方や服飾文化が何らかの形で影響を及ぼしているのではないかという推論を想起させるものである。

本稿は、英語動詞 ‘wear’ や ‘put on’ が「身につけるものになら、ほとんど何にでも使える」理由を、服飾文化史の観点から考察しようとするものである。そしてこの考察は、同時に日本語の着脱動詞が細かい使い分けをされる事実の説明にもつながって行く筈である。

第2章 言葉と文化の関係

日本語と英語を比較する時、我々はともすればその言語的な観点のみで現象をとらえ、その文化的な考察を怠りがちである。すなわち、言葉を言葉としてのみとらえて、その背景にある人々の生活文化に考察の対象を広げることは少ない。しかし、言葉が人間の作り出す文化のひとつであり、生活とは切っても切れない関係にあることを考える時、言語の比較分析も、それぞれの言語事象の背後にある生活文化を抜きにしては語ることができないのは明らかである。本稿で取り上げる着脱動詞についても、対照言語学の分野での日英語比較分析は、いくつかの先行研究が見られる。しかしそれらは、動詞の言語学的対照研究で、着脱という行為を移動表現のひとつとして捉えて動詞の意味構造を論じるものが多い。そしてそこで展開される考察も、語学上の分析に収斂してしまっている。しかしながら複数の言語における着脱に関する表現を深く考察するためには、それらの言葉を用いて生活している、あるいは生活していた人々の服飾文化について詳しく見て行く必要があると思われるのである。

私たちは、国際間の貿易や通信が日常的になったり、国境を越えた人々の移動や交流が頻繁に行われる時代に生きているので、言葉の対照比較をする場合にも、ほぼ同じ土俵の上で分析や考察を進めがちである。服飾文化に関して言うならば、お互いがほぼ同じような服装をしているという前提のもとに、英語動詞 ‘wear’ と日本語動詞「着ている」を比較分析してしまう。しかし歴史的に見てみると、英語を育んだヨーロッパと日本語を育んだ日本においては、人々が同じような服飾文化を持っていた訳ではない。したがって、これら着脱動詞の意味の広がりや用例の分析を考察しようとするには、その背景に存在する服飾文化の考察を進めることが必要不可欠である。

言い換えれば、英語の ‘wear’ が着用の対象としていたものはどのような物で、一方の「着ている」が着用の対象としていたものがどのような物であったかを調べる必要があり、そのような考察を進めることによって、両動詞の意味の広がりやの違いや、日本語における着脱動詞の使い分けの理由が自ずから明らかになって行くものと考えられるのである。

第3章 ヨーロッパにおける服飾の歴史

私たちは「洋服」と言われるものを着る機会が多いので、西洋の人々が皆「洋服」を昔から着ていたと思ってしまうことが多いが、ひとたび服飾文化史の書籍をひもといてみれば、現代のような「洋服」が現れたのは比較的新しく、近代になってからだということが分かる。

さてそれではここで、ヨーロッパにおける衣服の歴史を簡単に見ていくことにしたい。ヨーロッパの服飾文化の源流は古代ギリシアや古代ローマに端を発すると言うことができるが、それらの服飾文化の起源は、言うまでもなく古代エジプト文明や古代メソポタミア文明に溯ることができる。

古代エジプトでは、チュニック（トゥニカ）と呼ばれる半袖型の服が主流であった。これは亜麻で作られた長方形の布を二つ折りにし、両腕と首を通す部分を開けて他の部分を縫っただけのものである。これを着用して、腰の部分を紐で縛るという極めて簡素なものであった。またシンドーン（スーシュ）と呼ばれる亜麻製の布を体に巻き付けて着る、という巻衣型の服が早くも登場している。

一方、古代メソポタミアでもショールと呼ばれる巻衣型の服が着用されるが、こちらはエジプトと違って素材は羊毛であった。また裕福な者は、ショールの下にチュニックを着用した。

これらの服飾文化の影響を受けた古代ギリシアや古代ローマでは、人々の外衣の主流となったのは巻衣型のものであった。すなわち、たった一枚の布を体に巻き付けていくという形のものである。古代ギリシアではキトンと呼ばれる内衣を着用するのが男女共に一般的であった。キトンとは、基本的にチュニックと同じ作りの服である。長方形の布を折り返して柏餅状に体をくるみ、両肩のところをブローチで留め、ウエスト部分にベルトを締めて着用した。家の中ではキトン一枚で過ごしたらしいが、外出する時にはキトンの上にヒマティオンと呼ばれる外衣を着用したようだ。ヒマティオンも四角い布であるが、素材は羊毛で、体に巻いて使用した。紀元前6世紀から紀元前2世紀頃のことである。一方古代ローマでは、チュニックを内衣として男女共が着用した。古代ローマでは、羊毛製や麻製の布を用いたらしい。外出時には、チュニックの上にトガと呼ばれる外衣を着用したが、これは弓形に裁った長い毛織地の布で、これを片方の肩から前に垂らし、残りを脇下から背中に回し、再び肩から前に垂らして着装したという。

このように、古代ギリシアや古代ローマでは、いずれも内衣は貫頭型の服で、外衣は巻衣型の服であった。これらの服の特徴として、多くが1枚の布を体に巻くか簡単に留めのかして着用したもので、複雑な縫製は施されていなかったことが分かる。チュニックだけが布地を2枚用いたが、これらの縫製も複雑なものではなく、数箇所を簡単に縫い合わせるだけのものであった。またこれら古代の服の特徴として、上衣と下衣に分かれていなかった点も忘れてはならない。

さてこのような巻衣型を主流としたワンピース・スタイルはヨーロッパではその後も長く中世まで続く。一説にガリア人がブレーと呼ばれるズボンの一種を着用していたという話も伝えられているようだが、これも広く普及することはなかった。このようにヨーロッパでは、様々なバリエーションを施されながらも、専ら巻衣型の衣服が長く人々の身体を

覆うことになる。上下に分かれた服を着るというツーピース・スタイルが広がって行くのは、13世紀に入ってホーズまたはショーズと呼ばれるタイツ風ズボンが出現するようになってからのことである。当時のヨーロッパを包んだルネサンスの流れが、服飾文化にも大きな影響を与えたのである。しかし現代のようなズボンがこの時から一気に普及した訳ではない。当初はキュロットと呼ばれる半ズボンが正装とされ、長ズボンは下品な服と見なされていた。一般に貴族や上流階級の者がキュロットを着用し、一般庶民が長ズボンを着用した。ところが18世紀末にフランス革命(1789年)が起こるに至って、ヨーロッパの服飾文化も大きな転換点を迎えることになる。フランス革命は、服飾的観点からすれば、サンキュロット派(Sans-Culotte; キュロットを履かない/持たない意)が革命の中心勢力となってキュロットを履く貴族階級を打倒した革命であったのである。現代の成人男子が着用することの多いズボンの普及は、実はフランス革命以降のことなのである。

また女性用の服についても、15世紀末以降に上下に分かれた服が普及して、下衣が独立して発展し現代のスカートにつながる訳であるが、それ以前はチュニクの流れを汲むワンピース型の一枚衣が主な衣服であった。したがって、ヨーロッパでは近代に至るまで、男女共に上下に分かれていない衣服を着ていたのである。

第4章 「スカート型文化圏」と「ズボン型文化圏」

スコットランドの民族衣装であるキルトを男性が着用しているのを見ると、現代の日本人は驚いたり好奇の目で見たりすることが多いが、そもそもスカートは女性専用の服であった訳ではなく、男女共通の服であった。特にヨーロッパではズボンの普及が遅れた分、男女共にスカートを履いて生活するスタイルが長く続いた。

スカートとズボンという服飾文化の観点から世界地図を眺めると、世界が大きく「スカート型文化圏」と「ズボン型文化圏」に二分されてきたことが分かる。「スカート型文化圏」は主にヨーロッパ地域、一方の「ズボン型文化圏」はアジアを中心とした地域であり、日本も伝統的には「ズボン型文化圏」に含まれる。ヨーロッパではズボンが独自に創られることはなく、13世紀にオリエントからもたらされて初めてズボンの存在が知られた。しかし、ズボンはその実用性や機能性にもかかわらず、ヨーロッパでは下品な服と考えられる傾向が強く、特に上流階級の人々は忌み嫌ったと言われている。その理由として考えられる要因のひとつは、ズボンという服飾文化がオリエントというイスラム文化圏からもたらされたことが挙げられるだろう。宗教的にはキリスト教が絶対的に君臨していたヨーロッパ地域から見れば、オリエントは異教の地であり、そのような「蛮族」の生活文化を取り入れることには、少なからぬ抵抗があったに違いない。

そもそも「スカート型文化圏」と「ズボン型文化圏」を分けた要因は、気候の影響であったと考えられることが多い。暖かい地域でスカートが好まれ、反対に寒い地域ではズボンが好まれるという論理である。しかし、北欧など寒い地域でもスカートが普及していたり、アジアの暑い国々でもズボンが定着している事実を見ると、緯度の南北でこの服飾文化の二分化が発生したとは言うことができない。この問題に関して村上(1987; pp108-109)は、両文化圏を分けた主要因として、衣服の素材の違いという推論を展開している。

早くから主として農業段階に入ったアジアでは植物センイを、牧畜段階で私有財産の発達をみたヨーロッパでは獣皮毛皮を一般に使いはじめたためではあるまいかと思われる。(中略)植物センイの織物は、かるく、しなやかで、折りたたんだり、刻んだり、型をとったり、縫い合わせたりしやすい。また着ても軽く行動しやすいから、動く脚の形に合せてつくることができる。獣皮や毛皮はそうはいかない。重く、硬く、裁断も縫い合わせることも着つけも織物のように自由にはいかない。したがってそれは手や脚を包むよりも、胸から背中にかけて胴体をつつむ形(胴着)や、全体を掩う形(マント)を中心として発達した。

すなわち、アジアでは早くから農耕段階に入って植物繊維の利用法を知っていたのに対し、ヨーロッパでは牧畜を生業とすることが多かったために獣皮・毛皮を利用して衣服を作ることが主流となり、これが後の衣服文化の違いを生んだのではないか、というのである。確かに綿などの植物繊維は軽くしなやかなために、加工がしやすく、縫製も容易である。それに対して獣皮・毛皮は、硬くて重く、裁断や縫製が容易ではない。したがってヨーロッパでは、あまり細かい縫製技術を要することのない一枚布を身体に巻き付ける形の衣服が発達したという推論である。しかし、ヨーロッパと言えどもいつまでも獣皮・毛皮の服を身につけていた訳ではなく、アジア地域には遅れながらも植物繊維による衣服が既に古代文明の時代には普及している。

この問題に関して、辻原(2003; p.47)は次のように述べている。

のちに織物技術が発展し亜麻布や毛織物が開発されてもスカート型への愛着はたち切りがたく、たとえこれを大きくはずれるようなスタイルが考案された場合、おそらく、大衆の支持は得られなかったにちがいない。

植物繊維の代表格である綿の栽培は、インドや熱帯及び亜熱帯地域で数千年前にまでさかのぼる。日本に綿がもたらされたのは平安時代で、799年に日本に漂着したインド系コンロン人によって伝えられたと言われている。綿は麻やコウゾ、葛などの素材に比べ繊維がやわらかいので、縫製が容易でさまざまな形の衣服を生み出す原動力になったに違いない。人間の腕や足を覆う筒形の衣服縫製技術も、綿を素材とすることで確立したものであろう。綿がこのような比較的早くから伝播したことにより、縫製技術が飛躍的に進歩し、ひいてはこれが服飾文化に大きな変化をもたらしたのである。そして、アジア地域にズボン型文化圏が生まれ、上衣と下衣が分かれたツーピースの衣服が普及し、発展して行く。

一方、古より狩猟・牧畜を生業として営んできたヨーロッパの人々は、捕獲した動物の獣皮を使って衣服を作るという服飾文化を発展させて、スカート型文化を作り出して行った。そこでは、一枚布を身体に巻き付けるという巻衣型の衣服は育んでも、腕や足を覆うという筒形の衣服は長く生まれることはなかったのである。ヨーロッパは近代に至るまで、巻衣型ワンピースが主流を占めて行くことになる。

第5章 着脱動詞の日英語比較 I — 着る表現の分析 —

これまでの第3章と第4章では、ヨーロッパの服飾文化の歴史と、ズボンとスカートの地理的分布を概観してきた。本章では言葉の問題に立ち返り、着脱動詞の日英語比較を行うことにする。

衣服の着用を表す英語動詞は、動作動詞としては 'put on'、状態動詞としては 'wear' を用いるのが一般的である。一方日本語では、動作動詞としては「着る」、状態動詞としては「着ている」という着衣の時のみに用いる専用動詞を使うのが普通である。身につけるさまざまな対象物別に日英語の表現をまとめると、次のようになる。

表1. 日本語と英語の着脱動詞一覧（動作動詞）

上位語		下位語	
英語	日本語	英語	日本語
put on	着る	put on (perfume)	(香水を) つける
		put on (lipstick)	(口紅を) 塗る
		put on (a hat)	(帽子を) 被る
		fasten (a seat belt)	(シートベルトを) する
		put on (trousers)	(ズボンを) 履く
		put on (a ring)	(指輪を) はめる
		put on (a shirt)	(シャツを) 着る
		put on (a necktie)	(ネクタイを) 締める
		grow (sideburns)	(ほおひげを) 生やす
		put on (a coat)*	(コートを) 羽織る

注) 'fling on a coat' という表現も可能であるが、あまり一般的ではない。

表2. 日本語と英語の着脱動詞一覧（状態動詞）

上位語		下位語	
英語	日本語	英語	日本語
wear	着ている	wear (perfume)	(香水を) つけている
		wear (lipstick)	(口紅を) 塗っている
		wear (a hat)	(帽子を) 被っている
		wear (a seat belt)	(シートベルトを) している
		wear (trousers)	(ズボンを) 履いている
		wear (a ring)	(指輪を) はめている
		wear (a shirt)	(シャツを) 着ている
		wear (a necktie)	(ネクタイを) 締めている
		wear (sideburns)	(ほおひげを) 生やしている
		wear (a coat)	(コートを) 羽織っている

表1および表2で明らかなように、日本語の場合には着用する対象によって動詞が使い分けされており、下位語が発達していると言える。着用対象を衣服類に限ってみても、「(帽子を) 被る／被っている」、「(ズボンを) 履く／履いている」、「(シャツを) 着る／着ている」、「(コートを) 羽織る／羽織っている」などと細かく動詞の使い分けをしている。それに対して英語の場合には、着用する対象によって動詞が使い分けられることは少なく、下位語があまり発達していない。そしてこの傾向は状態動詞において顕著であり、正に‘wear’は「身につけるものになら、ほとんど何にでも使える」のである。

ここで、日本語における着衣動詞の使い分けについて、詳しく見てみることにしたい。『日本語基本動詞活用辞典』によると、これらの動詞の基本的な意味は、次のように定義されている。

被る：頭や顔を何かで覆う。

着る：全身や上半身を覆うような衣服を身につける。

履く：腰から下の部分に衣類を身につける。／足に履物を着ける。

「羽織る」については、同辞典に見出し語としての記載がないが、『広辞苑（第5版）』によれば「(羽織を活用させた語) 着物の上にうちかけて着る」と説明されている。

このような日本語辞典の記載で明らかなのは、日本語の場合には、体のどの部分に着用するかによって動詞が使い分けられていることである。「被る」は頭か顔、「着る」は全身または上半身、「履く」は下半身または足に使用領域が限定されている。

しかしこの問題をよく考えてみると、これらの着衣動詞の使い分けは身体部位だけに規定されているとは言い切れないように思われる。たとえば、赤ん坊に紙オムツをさせる場合に、「赤ん坊に紙オムツを履かせた」と、「赤ん坊に紙オムツを着けた」という二種類の動詞の使用が考えられるが、両者には微妙なニュアンスの違いが存在する。「履かせた」という動詞を用いた場合には、赤ん坊を立たせてパンツタイプの紙オムツを足元から引き上げる形で装着した感じがする。それに対して、「着けた」という動詞を用いた場合には、赤ん坊を寝かせて当該部位に紙オムツを装着した感じが強くするのである。このようなニュアンスの違いは、「履く」という動詞がある種の方向性、すなわち足のつま先部分から体の中心への上方向への方向性を含意していることを窺わせるものである¹⁾。また同様に「被る」という動詞についても、頭頂部から体の中心への下方向への方向性を含意していると言いきそうである。「波を被る」とか「埃を被る」という言い方があることも、この推論の妥当性を示しているものと考えられる。

さて次に英語動詞について見てみると、先にも触れたように、着用する対象によって動詞が使い分けられることはほとんどなく、‘put on’と‘wear’の二つで多くの場合は事足りるのである。それは、どうしてであろうか。なぜ日本語のように、身体部位や着衣方向によって動詞を使い分けをしないのであろうか。

ここでこの問題を、第3章と第4章で概観したヨーロッパの服飾文化史を援用しながら考えてみたい。古代よりヨーロッパ地域で発達した衣服は、大ざっぱに言って、一枚布を体に巻き付ける巻衣型のものであった。これは牧畜を生業とすることから必然的に生まれる獣皮・毛皮の利用というものがもたらしたものと考えられる。すなわち、獣皮・毛皮は縫製が難しい素材であるために、これを衣服にするには極めてシンプルな形で着用するし

がなく、これが巻衣型の衣類に発展して行ったものと考えられるのである。もちろん、古代文明の時代にも既に植物繊維の利用は始まっており、亜麻や葛、そして後には絹や綿などを素材とする衣服が作られるようになるが、デザインとしては上下に分かれることのない巻衣型や、ワンピース型のものがほとんどであった。ヨーロッパにおいては、ズボンの普及は中世以降にまでずれ込んだ。同じ人間の衣服とは言え、飛鳥・奈良時代に既に袴の着用が始まっていた日本とは、服飾事情は大きく異なるのである。

さてこのような服飾文化を念頭に置いて英語動詞の使い分けの問題を考えると、身体部位によって動詞を使い分けをしないという英語の特徴を生んだ理由が、自ずと明白になってくる。すなわち、衣服が一枚布であったり、上下に分かれていないワンピース型のものであったりする場合には、動詞の使い分けなど必要もないし、「履く」に対応するような下半身のみを着衣対象とする動詞が生まれる前提自体が存在しない。‘wear’の古形である古英語の‘werian’の使用が確認されるのは10世紀以前であり²⁾、その時代の人々の服装を考えてみると、着衣動詞‘wear’に衣服に関する下位語が発達しなかったことも頷けるのである。

また動詞‘wear’が衣服以外の装飾品などを目的語に取ることができることも、一枚布の巻衣を固定するために用いたブローチ類が衣服の一部として機能していた事実を想起すれば、自然な言語現象だと考えることができる。

第6章 着脱動詞の日英語比較Ⅱ — 脱ぐ表現の分析—

前章では「着る」ことを言い表す動詞について、日本語と英語とを比較してみた。本章では、反対に「脱ぐ」ことを表す動詞についての日英語比較を進めていくことにする。

日本語の着脱動詞は、着用する際には細かく使い分けがされていることを前章で観察した。ここで、脱ぐ際にはどのような動詞を用いるかを見てみると、興味深いことに動詞の使い分けはほとんどされていないことに気づく。日本語動詞の「脱ぐ」は一般的には「着る」の反対語だと考えられることが多いが、よく観察してみると、「脱ぐ」は「着る」だけに対応している訳ではない。表にまとめてみると、次のようになる。

表3. 着脱を表す日本語動作動詞

部位 \ 意味	着	脱
頭／顔	被る	(取る)
全身／上半身	着る	脱ぐ
下半身／足	履く	

動詞「脱ぐ」は「着る」という語の反対語であるだけでなく、「被る」や「履く」の反対語としても使われていることが分かる。すなわち、「帽子を被る — 脱ぐ」や「靴を履く — 脱ぐ」といった具合である。「被る」の反対語としては「取る」が用いられて「帽子を取る」とか「ヘルメットを取る」と言う場合もあるが、「履く」の反対語としては「靴

を脱ぐ」とか「靴下を脱ぐ」と言うように一般的には「脱ぐ」しかない。このように、日本語の着脱動詞は、着衣と脱衣において非対称的な使い分けがされていることが分かる。

この問題に関して當野・呂 (2003; pp131-132) は、次のように述べている。

脱衣の動詞では、着衣の動詞に見られる身体部位の指定による区分が中和されてしまう。これには次のようなことが関係しているものと思われる。衣服は着用している時は服としての機能を果たしているのであるが、それを脱いでしまった時にはその機能は果たしていない。つまり、脱衣の動詞において、身体部位の指定が中和してしまうのは、このような着用している時と脱いだ時の服の機能の違いを反映している可能性があると考えられる。

この記述の中で用いられている「中和」という言葉は影山 (1980; p103) でも使われており、「着衣で問題になる身体部分の区別が『脱ぐ』では中和される」(下線: 筆者) と述べられている。しかし影山 (同上) では、「中和される」理由についての特別な言及や論考は見られない。

そこでここでは、この問題について更に深く考えてみることにしたい。日本語の着衣動詞の持つ特徴として、衣服を着ける身体部位によって異なる動詞を用いることがあった。すなわち、頭や顔の部位には「被る」を、上半身および全身には「着る」を、そして下半身および足の部位には「履く」を使い分けるというものである。しかしこれらの動詞の使い分けは単に着衣部位のみに支配されているだけでなく、「被る」や「履く」には、着用する際の動作の方向性をもが含意されているように思われることを前章で考察した。

この着衣動詞に関する推論を進めて脱衣動詞について考えてみると、脱衣の際には身体部位だけでなく、脱衣方向もが「中和」されてしまうことになる。着衣の際に暗示される着衣動作の方向性は、脱衣においてはどのように消えてしまうのであろうか。當野・呂の言うように、「衣服は着用している時は服としての機能を果たしているのであるが、それを脱いでしまった時にはその機能は果たしていない」から身体部位は問題にならないとしても、脱衣の動作においてその方向性が無視されることの説明にはならない。

ここで視点を変えて、着脱動詞が「状態」の意味を持つかどうかという観点から日本語の動詞を見てみたい。影山 (同上; p104) は日本語の着脱動詞に関して2つの例を上げ、日本語の脱衣動詞に状態の意味がないことを指摘している。

動作も状態も表す着衣動詞と異なり、「脱ぐ」は動作の意味しか持たないようである。
次例の a 文と b 文を比較。

- (148) a. その服をいつも着なさい。
b. * その服をいつも脱ぎなさい。
(149) a. 私は1年間その靴をはき続けた。
b. * 私は1年間その靴を脱ぎ続けた。

影山の上げる上記の例のように、着衣の場合には状態を表すことが可能であるが、脱衣の場合には非文となる。確かに、「いつも脱ぎなさい」や「1年間その靴を脱ぎ続けた」は明らかに不適格文である。この不適格性と、脱衣方向が「中和」されることに関係はないであろうか。「着続ける」ことや「はき続ける」ことが適格であるのに対して、「脱ぎ続ける」ことが不適格なのは、脱衣の行為が動作のみとしか受け入れられないことを示している。しかし脱衣動詞が脱衣状態を表現できないことは、逆説的には「着衣行為が特別な

もので、脱衣している状態が自然である」ことを暗示しているものとも言える。人間にとって裸体が本来的なものであるという原則に立ち返れば、脱衣動詞が脱衣状態を表現できないことも自然であり、脱衣の方向性が問題にされなかったとしても不思議ではない。着衣において細かい動詞の使い分けが認められる日本語ではあるが、脱衣においてそれが認められないのは、このような理由によるのではないだろうか。なお脱衣動詞が脱衣状態を表現できないことは日本語だけでなく、英語においても同じく認められる現象であり³⁾、この特徴が日英両言語に存在するということは、何らかの普遍的な文化的要因を暗示しているものと考えられる。

さて、日本語と同じく脱衣動詞が状態を表すことのない英語であるが、その着脱の全体像はどのようになっているのであろうか。日本語とは異なり、英語の着脱動詞の使い分けは、表4のようにシンプルで対称的なものとなっている。

表4. 着脱を表す英語動作動詞

部位 \ 意味	着	脱
頭／顔	put on	take off
全身／上半身		
下半身／足		

日本語において着衣に関しては、「体のどこの部位に、どのような物を、どのような動作で身につけるか」ということが細かく捉えられて動詞の使い分けがなされているのに対し、「脱ぐ」ことに関してはそれほど細かい捉えられ方はされていなかった（表3）。そういう観点から表4を見ると、日本語動詞の「脱ぐ」は、正に英語動詞の‘take off’に対応しているように見える。しかしながら、‘take off’が‘take off earrings’とか‘take off makeup’というように装飾品や化粧などにも使われるのに対して、「脱ぐ」は衣服関係のもの以外には用いられない。そういう意味では、‘take off’の方が意味範疇の広い語であると言える。また別の言い方をするならば、日本語の「脱ぐ」が脱衣専用動詞であるのに対し、英語の‘take off’は非専用動詞であり、この対応関係は、「着る」と‘put on’の関係と全く同じなのである。

第7章 まとめ

本稿では着脱を表す動詞を取り上げ、英語と日本語とを比較分析してきた。その結果、次の諸点を確認することができた。

1. 英語の着脱動詞は、着衣・脱衣共に非専用動詞が用いられ、専用動詞は存在しない。
2. 日本語において着衣を表す動詞は、主要な衣類に関しては専用動詞を用い、それ以外の衣類や装飾品に関しては非専用動詞を用いる。
3. 日本語において着衣を表す専用動詞は、衣服を着ける身体部位によって異なる動詞

を用いる。すなわち頭や顔の部位には「被る」を、上半身および全身には「着る」を、そして下半身および足の部位には「履く」を使い分ける。

4. またそれらの着衣を表す専用動詞のうち、「被る」と「履く」には、着用する際の動作の方向性が含意されているように思われる。
5. 日本語において脱衣を表す動詞は、基本的に「脱ぐ」という専用動詞だけである。
6. 「脱ぐ」は身体部位がどこであるかに関わらず用いられ、「着る」の反対語になっているだけでなく、「被る」や「履く」の反対語にもなっている。
7. 日本語の「脱ぐ」は英語の 'take off' とほぼ同じ意味範疇を持つように見えるが、前者が脱衣専用動詞であるのに対して、後者は非専用動詞であるので、後者の方が意味範疇が広い。

さてこれらの日英語比較を通して、着脱動詞に関する両言語の実態がある程度明らかになったと思われるが、最後にこのような着脱の動詞に関する言語間に認められる相違点と共通点はどのような要因によって生じたものかを考えてみたい。

第2章でも論じたように、言葉と文化は切っても切れない関係にあり、言葉は文化を映す鏡だと言うこともできる。そういう観点から本稿でテーマとして扱った着脱動詞の諸相を改めて見直すと、動詞の使い分け区分や意味範疇の差異が少なからず服飾文化の影響を受けている痕跡を認めることができる。

日英語の着脱動詞において見られる大きな相違点のひとつが、着衣を表す表現において日本語の場合は身体部位によって異なる動詞を用いるのに対して、英語の場合には身体部位によらずすべて同一の動詞で済ませるという言語的事実であった。これを、英語を育んだヨーロッパの服飾文化の歴史と照らし合わせて考える時、近代に至るまで筒形の縫製技術やズボン文化が定着せず巻衣型ワンピースが主流を占めていたことと、無関係であるとはとても考えられない。衣服の形態が一枚布を身体に巻き付けるという巻衣型である限り、下半身にのみ用いられる着衣動詞が生まれる前提がないのである。そういう意味で、日本語の「履く」にぴったりと対応する着衣動詞が英語にないのも、必然的なことと言えるのである。またこれは英語に限ったことではなく、ドイツ語やフランス語においても事情は同じである⁴⁾。ヨーロッパでは言語系統もさまざまな多くの言語が話されているが、それにもかかわらず「履く」に正確に対応する着衣動詞が見当たらないことは、その原因をヨーロッパの服飾文化に求めざるを得ない。

有史以来、人類は壮大な服飾文化を多彩に展開して来たが、その諸相の一端が着脱動詞の使用区分や意味範疇といった言語事象の上にも現れていることを、本稿では確認することができたのではないかと考えている。

注)

- 1) このことに関して、影山（(1980 ; p.81) は巻きスカートを例にとり、「巻きスカートは下半身を包み込むようなかっこうで装着するので、多くの話者は『洋子は大急ぎで巻きスカートをはいた』（という文）を許容しない」と述べている。これは「履く」という動詞が、その着用する身体部位だけを指定しているのではなく、着衣方向をも含意していることの傍証となっているものと考えられる。
- 2) *The Oxford English Dictionary* によると、文献上で 'wear' の古形である 'werian' の初出が確認されるのは、西暦 893 年のことである。
- 3) 影山 (1980 ; p.104) の上げる (148) a, b および (149) a, b の日本語に対応する英文は、それぞれ次のようになると思われる。
(148') a. Keep wearing these clothes any time.
b. *Keep taking off these clothes any time.
(149') a. I've been wearing those shoes for a year.
b. *I've been taking off those shoes for a year.
これらの例で明らかなように、英語においても脱衣動詞は脱衣状態を表現できない。
- 4) ドイツ語やフランス語においては、「履く」と「着る」の動詞上の区別はない。ドイツ語の 'anziehen' およびフランス語の 'mettre' は、いずれも「履く」と「着る」の両方の意味で用いられる。日本語と比較すると、服飾をめぐる文化的な差が語彙化に反映した例とすることができるだろう。

引用文献

- 影山太郎著 (1980) 『日英比較 語彙の構造』 松柏社
金田一春彦著 (1988) 『日本語 新版 (上)』 岩波書店
小泉保・船城道雄他編 (1989) 『日本語基本動詞活用辞典』
辻原康夫著 (2003) 『服飾の歴史をたどる世界地図』 河出書房新社
當野能之・呂仁梅 (2003) 「着脱動詞の対照研究 日本語・中国語・スウェーデン語・マラーティー語の比較」『世界の日本語教育第 13 号』国際交流基金日本語国際センター
新村出編著 (1998) 『広辞苑 第 5 版』 岩波書店

参考文献

- 小西友七・南出康世編著 (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 大修館書店
村上信彦著 (1987) 『服装の歴史 3』 理論社
森住衛著 (2004) 『単語の文化的意味』 三省堂
ミシェル・ボーリュウ著／中村祐三訳 (1974) 『服飾の歴史－古代・中世篇』 白水社
ミシェル・ボーリュウ著／中村祐三訳 (1976) 『服飾の歴史－近世・近代篇』 白水社
The Oxford English Dictionary (1933) Oxford University Press